

幼児の役割あそびについて



—その問題点と指導法を中心として—

神沢 良輔 前田 正子
亀井 貞子 伊藤智恵子
疋田 房子 井上 公子

(I) ごっこあそびとその問題点

役割あそびということばは、耳なれない方も多いと思われるが、一般に幼児教育で使われていることばでいえば、「ごっこあそび」ということになる。ごっこあそびということになると、幼稚園などのカリキュラムにはよく登場してくることばである。即ち「お店やさんごっこ」「乗物ごっこ」「お家ごっこ」など似たようなことばまで入れて書きあげるときりがないと思われるくらい多いであろう。

そして、それらのごっこあそびでは、多かれ少なかれ、幼児の経験の一つのまとまりとしての單元活動ということをも、教師は予想するであろう。このようなことが予想されるということは、歴史的にみても、実際的にみても、幼児教育のもっている、ごっこあそびに對する考え方の特徴をあらわしているといつてよい。

その理由としては、いろいろなことが考えられるが、

(i) 幼児教育が、あくまでも幼児の具体的な生活経験に根ざしたものでから出発していこうとする指向性をもっており、そのために幼児の生活ともいえるあそびを重視したこと。

(ii) しかも、あそびの中で、幼稚園期にもっともよくあらわれる模倣あそび(ごっこあそびもこの中に含まれる)——をその糸口として、教育の対象にしようとしたことである。

(iii) また、模倣あそびは、あそびが発展していく傾向が強く、発展の順序がある程度予想されることから、單元として展開しやすい。

(iv) そして、その発展の過程をみていくと集団あそびになる可能性が強く、それをのほすことによつて、社会的行動や社会的適応についての教育が可能になること。

(v) なお、その上に、これらの遊びの過程で、製作や言語、社

会的認識、その他多くの経験や活動が予想され、その中に、幼児教育の多くのねらいが達成されるということ。

など、いろいろな面で幼児教育としての多くの利点を含んでいる。このように、模倣あそびは、幼稚園においては、ごっこあそびというこで、小学校では、ある程度すたれかけているのにもかかわらず、単元学習的な方法で、いまでもよく使用されているのである。では、ごっこあそびは、幼児教育の特性にもとづく、実際指導の有力な手がかりとして、現在のままでよく、何も問題を含んでいないかという点、実は解決されなければならない、いろいろな問題点がかくされているのではなからうか。そこで、気づいたまを以下に記していくことにする。

(一) ごっこあそびは、単元として展開されている場合が多いが、単元活動として展開する場合、一応の幼児の経験や活動の内容についての予測を必要としよう。その場合、それが社会的な現象や事実についての模倣であることが大部分であるので、教師としては、こちらの面からのみ取り組み、幼児を、自分の意図する社会的現象や事実の模倣へのみもっていく可能性が強く、そして、それが完了するこが単元の完了を意味するというこになりやすい。即ち、社会的現象や事実についての模倣による、社会的な認識というこによって単元を構成していくという、小学校での単元学習的な方法そのままとり入れて模倣することによって単元を構成しやすいというこである。だから、このような立場から単元を構成すると、そ

の中で幼児のいろいろな経験や活動を予定していても、ともすると、それが社会認識の系列の中で位置づけられ、そちらの方へ幼児をむりに誘導する可能性が、多かれ少なかれあると思われるのである。

こわっておくが、わたくしどもは、幼稚園における単元活動を否定しているわけではないし、こで単元論をのべようとしているわけでもない。けれども、前述のような面についての反省はしなければならぬだろうという事実をのべているにすぎない。というのは、ごっこあそびでの幼児の経験や活動を、もし単元として構成するならば、現象や事実からのみ構成するというこでなく、もっと広く幼児の経験や活動を構成してみたらということである。きわめて端的でない方をすれば小学校流の社会認識の系列からくる単元構成以外の、幼児教育らしい方法が考えられないかということでもある。

(二) ても、実際には困難な問題が含まれているようである。社会的な認識の系列を中心にせずに、ごっこあそびでの展開を考えると、幼児たちのあそびの質そのものを考えなければならぬし、経験や活動の質そのものが問題にならないと思われからである。だから、実際の指導においては、幼児のあそびの質——(その中に含まれる教育的価値)——を問題にしなが、教師は適当に、社会的な認識の発達に従って指導していこうということになるからである。

(三) ところで、つきにはあそびの質や経験や活動の質そのものが問題にされねばならないのであるが、その前に、ごっこあそびを規

制している集団の質とその発展ということが考えられよう。即ち、幼児のあそびの質や発展のためには、そのあそびを構成している集団の質やその構造が問題になる。

(iv) そのためには、ごっこあそびが、集団の成員の共通の目的によつてなされている場合と、そうでない場合とでは、発展の過程が異なるであろうし、それについてどのように指導すればよいのかということが問題になる。

(v) さらに、集団の成員が集団としての共通の目的をもつたためには、幼児なりにどのような集団の過程をたどればよいのかということや、幼児の集団にそのような共通の目的をもつことが可能かどうかとも問題にならう。

(vi) そして、さらに極端に言えば、ごっこあそびが発展するために必要な幼児集団としてのレディネスや契機に何を考えたらよいのか、というようなことが問題にならう。

さて、ごっこあそびの問題点についてくどくどと述べてきたが、ここで、わたくしどもが、ごっこあそびとすることを問わずに役割あそびとすることを使った理由を記して、ごっこあそびに対するわたくしどもの考えていること、したいことを記し、ごっこあそびに対する、わたくしどもの問題提起をつぎの節でしておくでしょう。

(II) 役割あそびの特質とその問題点

幼稚園期の幼児のあそびの大部分が、模倣あそびであるというこ

とについては、まえにも述べた。そして、このような模倣あそびの中で集団としてのあそびに発展し、集団成員の間になんらかをしようというような目的のような指向がみえはじめたものに対しては、一般にごっこあそびと呼んでいるのであろう。

だから、ごっこあそびの中には、ままごつのような、非常に幼児の身近な経験に属するものの単なる模倣というようなものも含まれていようし、逆に、汽車ごつこや郵便屋さんごつこのように、成人の社会的な機能についての模倣というような、相当広い経験に属するものも含まれている。そして、前者と後者では、同じごっこあそびでも遊びの内容や質に関しては相当の開きを示している。

そこでわたくしどもは、後者の、社会的な機能をもつたものを、幼児なりに模倣したごっこあそびについて、前者のごっこあそびと一応區別して、役割あそびとしてとりあげたのである。だから、広い概念でごっこあそびという名前でも別にかさしつかえはない。けれども、役割あそびになると、あそびの内容や発展において、前者とは異なるものがあると思われるのである。即ち、

(i) あそびの発展において、役割の分化が中心になりそれぞれの役割の分担はグループでなされることが多いことである。例えば、ままごつであれば、役割は、お父さん、お母さん、兄弟姉妹というように個人で受けもたれるが、のりもの遊びであれば、駅務員という役割でも、出札係、改札係などというように分化し、しかも、それぞれの係もグループでなされることも可能である。また、

あそびの發展が、役割の分化の程度に依存する場合が多い。これは、社会的な機能を模倣することによるのである。

(ii) そして、それぞれの役割を分担したものは、絶えず全体の集団の動きに関係のあることである。例えば、出札係、改札係のもの、お客や、他の駅のこと、発車する列車のことなどを考えて自分の分担した仕事の位置づけをしていかねばならないだろう。ままたごの場合などでは、自分の役割を自分だけの意志で、相当自由な解釈をして行動することが可能である。

(iii) そのためには、幼児なりに、それぞれのあそびのもっている社会的機能を理解している必要があるし、それぞれの役割の内部や役割の間で、共通のルールをつくることや、それを成員が知っておくことが必要になる。そして、役割間の共通ルールがうまくいかないと、役割の分化もしないし、遊びの發展も停止することになる。そのためには、幼児なりの協同ということや、ルールを集団決定するということが必要になる。

(iv) また、役割が分化していけば、そこであそぶ集団の成員の数も相当に増加しなければならない。30〜40人も必要とするということもあろう。

(v) そして、これらの集団の成員のすべてが、役割を意識し、共通ルールをもち、共通の目標であそぶことが可能になれば、そのあそびは、役割あそびでもっとも程度の高いものになる。だが、役割あそびについての概念には問題がないにしても、この記述には

多くの疑問が残る。というのは、ここに記したような役割あそびが果して幼児にとつて可能なかどうか、幼児の發達の程度や、社会的な行動の水準からみて、妥当なかどうかということである。

これは前節でべた、社会的認識の系列で單元を組むことや、それを基礎にして指導することの無理なことと同様に、幼児集団に対して、あまりにも大きな期待をかけたことによる無理があるのではないだろうかという疑問が残り、幼児のあそびの質や、そこでの経験や活動の質を問題にするということの實際指導での困難性がある。

そこで、この問題について、もう少し考えてみなければならぬということになろう。

これまでいろいろ理屈を並べて記してきたことは、実は、わたくしどもが、『役割あそび』についての研究にとりくんだ動機なのである。そこでわたくしどもは、これらの疑問について少しでも明らかにしたいと思つて、以下にのべるようなことについて研究をすることにしたのであるが、まだ、多くの疑問は解決されていない。

(iii) 役割あそびの指導上の問題点

わたくしどもの研究では、役割あそびの指導の場合、その手がかりとして、もっとも困る問題は何かということをとあげて、それを追及してみることにした。そこで、役割あそびの指導上の問題点のうち、研究に関係したものを以下に記したい。

第一には、幼児たちの遊びの發展にもなつて役割は分化してい

くが、役割の分化にともなって、共通ルールがどのように発生し、どのようにして集団の成員に認められるかということである。即ち、のりものごっこに例をとった場合、いくつかの列車ができるであろうが、それぞれの列車の間に共通のルールがどのようにできるかということである。

ある列車の停車する駅と、他の列車の停車する駅が同じでなければいけないし、さらにいえば、それぞれの役割の幼児たちが、同じ場所に、同じような駅名をもった駅を認めていなければ遊びの発展は望めないということになる。もちろん、実際の指導においては、役割を教師がきめ、駅の場所も駅名も教師がきめることは可能である。けれども、すくなくとも幼児の集団の成熟度が、そのようなことを自分たちできめることを可能にする段階に達していなければ、役割あそびでの幼児の自発性にもとづく発展は考えられないということになる。また、いくら教師が誘導しようとしても、その手がかりをつかむことができないし、結局は共通ルールのようなものを押しつけてしまう結果になりかねない。

そこで、どうしても、幼児集団の役割あそびでの共通ルールについての成熟度というようものを考えてみる必要があるであろう。また、そのようなものが明らかにされれば、それをもとにして指導の手がかりもつかむことが可能になろう。

第二には、幼児の集団の成員としての、他の成員との交渉の水準が役割あそびではどの程度かということが問題になる。即ち、共通

ルールの発生にしても、役割の分化にしても、幼児たちが、自分以外の集団の成員との程度の交渉がもてるかということは、役割あそびそのものの質を決定することになるし、また、その発展の水準を決定することになるであろう。幼児の他の成員との交渉には、言語を使用するもの、何らかの物的な環境を媒介にするもの、行動によって交渉するものなどが考えられるが、そのいずれの方法をとるにせよ、そのような交渉の水準を理解しておくことは、指導面で見れば、遊びの発展の水準や、指導の水準を予想するもつとも基本的な手がかりをにぎったことになるだろう。

では、以下に ① 共通ルールの発生と発展 ② 幼児の集団との交渉についての実態を示し、それかららみた役割あそびの指導法について考えてみたい。

(Ⅳ) 共通ルールの発生と発展

では、共通ルールの発生と発展についてみていくことにしよう。その前に、わたくしども研究に使用した方法について、参考のために簡単にのべておきたい。

(1) 研究の方法

研究の方法は観察法によることにして、時間見本法——(ある一定の時間を限って、一定の事象について観察を行ない記録をとっていくという方法)——を使用した。とくに、この研究では、いろいろな困難は予想されるが、幼児教育の実践面での資料としても役立つ

つように、集団の大きさについては、できるだけ一般の学級の大きさに近い被験者数にすることにした。そして、幼児にさせた役割あそびは、幼児のもっとも好む「乗物こっこ」とした。

さて、この研究で実際に使用した方法のうち、主要なものは以下のようである。

(一) 被験者…四日市幼稚園児(5才児1年保育5学級)の幼児の

中から、各学級男児3名女児3名計6名を仲よしグループを単位として選び、5つの集団を構成した。

被験者の総数は30名である。

(二) 観察回数…4回とし、途中で1日観察を休んだ。

(三) 観察時間…1回30分とする。

(四) 遊びの材料…あそびの場面は、ホールの真ん中に材料コーナーをおくだけとし、材料コーナーにあらかじめ固定したものは以下のものである。

(イ) 網…2 (ロ) 笛…2 (ハ) 切符きり…2 (ニ) 各幼児の道具箱 (ホ) 画用紙 (ヘ) 色画紙 (ヘ) マジノクインキなど

なお上記のうち、(イ)、(ロ)、(ハ)については幼児が要求しても追加しなかった。

(V) 記録の方法…記録は3分を単位として、観察用紙をかえて記録のと観察の要点…要点は以下のようである。

(イ) 幼児は言語を中心に、個人またはグループに分けて、できるだけいいに記録する。

(ロ) 行動については、どこでだが、だれと、何を

ってなにをしていたかを中心に記録する。

(イ) 言語については、どこで、だれが、だれに対して、どのようにしたかを中心に記録する。

(ロ) ルールについても、行動や言語の中含まれにくいものについては記録する。

(ハ) 遊びの場面とその変化についても記録できる限り、記録に残しておくよう努力する。

(2) 観察の結果について

さて、幼児の役割あそびの発展にともなって発生した共通ルールを、役割ごとにして一覧にして示すと、第一表のようになる。この表から以下のようなことがいえる。

(一) 集団間の共通ルールの発生は、各学級を単位とした仲よしグループから発達したルールが多い。即ち集団内ルールから発達しているといえる。そして、この集団内ルールが2、3の集団に認められた集団間ルールに発達していき、最後に、全体の幼児に認められた集団間ルールへと発展している。

例えば、駅についてみると、第1日目には、乗務員のグループが勝手に自分たちの都合のよいところに駅をつくって、乗客を乗せたり降ろしたりしているが、二つの汽車のグループでできた駅はまちまちで、あるグループの汽車はとまって、他のグループの汽車はとまらないといったようである。

第2日目になると、これらのうち、あるグループの汽車と、ある

グループの乗客の間では、ピアノの前は名古屋駅というように駅の位置と駅名をルールとしてきめるということがみられるようになった。だから特定の集団の間には、ルールが発生したといつてよい。

第3日目になると、名古屋駅に出札・改札係ができ、2台の列車とも、名古屋駅では必ず停車して、乗客を乗降させるということが、全集団の共通ルールとして発展している。

第4日目においては、駅の位置や駅名については、第3日目にきめられたルールがそのまま続けられているが、名古屋駅では、乗客は、お金をはらって出札で切符を買い、改札で切符を切ってもらわないと乗車させてもらえないと

表1 幼児の遊び中に発生したルール

	乗務員間	乗務員と乗客	乗務員と乗務員	駅務員と乗客	駅務員間	その他
第一日	<ul style="list-style-type: none"> 2つら1つ な発車、な停車 笛をとな な発車、な停車 笛をとな 	<ul style="list-style-type: none"> 乗客が切符を渡す 自分で作って乗る 	×	×		<ul style="list-style-type: none"> 名古屋駅でできる 東名駅でできる 京都駅でできる 乗名駅でできる 四日市駅でできる 切符をつくる お金をつくる 銀行をつくる
第二日	<ul style="list-style-type: none"> な発車 な発車 名古屋、大阪必ず停車 	<ul style="list-style-type: none"> 同上 コーンで作った乗車 材料も乗車 	×	<ul style="list-style-type: none"> 乗車の改札切符のしをもせる 	<ul style="list-style-type: none"> 乗車と改札切符のしをもせる 乗車切符のしをもせる 乗車切符のしをもせる お金のしをもせる 	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋駅でできる 大阪駅でできる 東京駅でできる 四日市駅でできる 神戸駅でできる 乗客や乗客のしをもせる 乗客のしをもせる 乗客のしをもせる 乗客のしをもせる 乗客のしをもせる
第三日	<ul style="list-style-type: none"> 発車は必ず 発車は必ず 名古屋、大阪、二つとも必ず停車 	<ul style="list-style-type: none"> 切符を買った乗客をのせる 改札して切符を無効にする 	○	<ul style="list-style-type: none"> 改札切符のしをもせる 	<ul style="list-style-type: none"> 先行切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 別切符のしをもせる 	<ul style="list-style-type: none"> 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋駅でできる 大阪駅でできる 東京駅でできる 神戸駅でできる 四日市駅でできる 金や切符や乗客のしをもせる 金や切符や乗客のしをもせる 金や切符や乗客のしをもせる 金や切符や乗客のしをもせる
第四日	<ul style="list-style-type: none"> 発車は必ず 発車は必ず 名古屋、大阪必ず停車 	<ul style="list-style-type: none"> 切符を買った乗客をのせる (名古屋駅に限り) 	○	<ul style="list-style-type: none"> 改札切符のしをもせる (名古屋駅に限り) 	<ul style="list-style-type: none"> 同上 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 	<ul style="list-style-type: none"> 同上 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる 名古屋は改札切符のしをもせる

(註) ◎は5つの集団に認められた集団間ルール、○は2～4の集団に認められた集団間ルール、×印は集団内ルール

いうようになった。この例は、駅を中心としてみてきたのであるが、このような傾向は、他の役割についてもいえることである。

(ii) このように、共通ルールの発生と発展は、日を追うに従って、次第に量においても増し、質においても深まっていく傾向になっている。しかし、この研究では、観察期間を限定した関係で、幼児のあそびの発展により、共通ルールが、最終的には、どのようになっていくかについての見透しは困難である。

(iii) つぎに、どのような幼児が、どのような機会に、ルールの作成のない手になり、それがどのようにして、集団の成員に認められていくかということについてみていきたいのであるが、この研究では、はっきりとした結論をだすことが困難であった。けれども、多くの場合、あそびの発展過程において、ルールは、それぞれの集団の中の幼児たちのトラブル解決のための話し合いの結果でてくるようである。このことは、集団の幼児間の言語の受容・拒否の関係において(第2表参照)集団内より、集団間に拒否より受容の多いことからみてもわかる。

(iv) そして、このようにして発生したルールのうち、きわめて幼児の社会経験としてわかりやすく、実際的にみてわかるものが、集団の幼児の中に滲透していき、共通のルールへと発展している。もちろん、これには、幼児の社会的認識の程度とも関係はあろう。

以上簡単に、共通ルールについての観察の結果をみてきたが、幼児が役割あそびをする場合、それがインフォーマル・ルール(非公

式ルール)であれ、フォーマル・ルール(公式ルール)であれ、集団間のルールにならないかぎり、あそびの発展は望めないであろう。そして、幼児たちが、集団内で勝手はらばらなルールに従って行動している限りにおいては、役割あそびそのものも成立しなくなるであろう。このような意味において、共通ルールの発生と発展の問題は、役割あそびにとって、もっとも重要なものになろう。

(V) 幼児の集団との交渉

つぎに、幼児が集団の成員として、役割あそびの中で、どのように集団内、集団間で交渉していくかについてみていこう。なお研究の方法は、共通ルールでのべたのと同じであるので省略する。

幼児の集団との交渉は、行動による交渉と、言語による交渉との二つの側面的に大きくわけてみられよう。そこで、はじめに、行動による交渉からみていこう。

(1) 行動による交渉について

幼児たちが、あそびの中で、それぞれの集団の成員と、どの程度交渉したか、そのグループの大きさはどの程度か、そのときのそれぞれの成員の属しているそれぞれの集団の拡がりほどの程度かなどについて以下のようなことがいえよう

(1) それぞれの集団との交渉によって、自分の属さない集団の幼児と遊んだ回数は、第一日目は3回、第2日は8回、第3日は19回、第4日は25回と、日を追うに従ってその数は増加している。ま

だ、増加の傾向を率で示すと、第2日は2.7、第3日は6.3、第4日は8.3となり、第2日と第3日の間での増加が著しくなっている。

(ii) また、これを観察の時間帯別してみると、3分〜12分の間に19回、12分〜21分の間に11回、21分〜30分の間に21回となり、あそびの始期と終期で、他集団の幼児たちと幾分よくあそぶということがいえる。

(iii) これらのことから幼児の、役割あそびでの役割の分化の傾向や、その持続時間についての特性を知ることができるだろうし、この結果を逆に利用して、その発展をさせるための工夫も考えられる。

(iv) つぎに、それぞれの集団の成員と、どのような場面でもっとも多く交渉をもつかということについてみると、その場面はのりものと駅に限られ、他の場面においてはみられなかった。

(v) そして、これを役割の交代という側面からみると、運転士・車掌・駅務員の場合、ほとんどが最初に始めたものが、役割を交代することなく、最後まで続けている。けれども他の役割においては交代が激しく行なわれている。

(vi) つぎに、それぞれの集団の成員と交渉をもった個人の属している集団の数をみると、大部分が、2つのグループの成員で占められている。この傾向から、幼児集団の集団間の成員との交渉の水準は、この程度と認めてよいのではなからうか。

(vii) だから、ここに示した実態より程度の高い役割あそびを要求するならば、指導としては、相当に強力にすることが大切である

うし、その場合、幼児の集団の質は相当高くなっていなければ、幼児のあそびは発展しないことになる。

(viii) そのためには、幼児の役割あそびにおける集団のもつ水準についての実態を教師はどうしてもよく知っておく必要がある。

(2) 言語による交渉について
つぎに言語による交渉についてみていくことにする。

幼児たちの会話のうち、乗物ごっこに直接関係している会話を、同じ集団の成員の間での会話、他の集団の成員との間での会話に分け、さらに、それらの会話のうち、集団の成員に受け入れられたもの、拒否されたものについて、その数を示すと第2表のようになる。この表から以下のようなことがいえよう。

(1) まず会話数を全体的にみると、その総数において、第1日は40回、第2日も40回、第3日71回、第4日36回となつて、第3日を除いて、総数においてその変化はあまりみられなかった。

(ii) たたし、これを同じ集団内、他の集団の成員との会話——(集団間の会話)——に分けてみると、前者については、第1日34回、第2日22回、第3日31回、第4日17回となっているのに対し、後者では、第1日2回、第2日8回、第3日38回、第4日19回と、第4日を除き著しい上昇をしている。

(iii) そして、両者の関係を比率でみると、第1日に85%と5%で集団内での会話が断然多いが、第2日は55%と20%となり、第3日は44%と53%、第4日は47%と53%となつて傾向としては、集団

第2表 遊びに関係した幼児の会話数

		集 団 内								不 明	計
		集 団 内				集 団 間					
		受 容	拒 否	そ の 他	計	受 容	拒 否	そ の 他	計		
第1日	f	11	7	16	34		2		2	4	40
	%	28	17	40	85		5		5	10	100
第2日	f	11	5	6	22	4	2	2	8	10	40
	%	28	12	15	55	10	5	5	20	25	100
第3日	f	10	10	11	31	21	7	10	38	2	71
	%	14	14	16	44	29	10	14	53	3	100
第4日	f	5	6	6	17	11	5	3	19		36
	%	13	17	17	47	31	14	8	53		100
計	f	37	28	39	104	36	16	15	67	16	187
	%	19	15	21	55	19	9	8	36	9	100

内での会話より集団間での会話の方が多くなっている。
 (iv) つぎに、第2表にはないが、幼児の遊びでの役割ごとの会話についてみていくと、集団内での会話は乗務員間、乗務員と乗客間で一番多く交わされている。また、集団間での会話については、

乗務員と乗客、乗務員と乗客の間で交わされたものが多い。

(v) 最後に、会話が他の成員に受容されたか、拒否されたかについてみていくと、受容されたものの方が、拒否されたものより幾分多くなっているが、集団間の成員での会話の方は受容される率が、集団内の成員での会話より多くなっている。これについては、共通ルールのところでのべた。

(vi) このような実態は、まえの行動による交渉のところでものべているように、役割あそびの発展の過程の上で、教師が幼児を観察して理解しておく大切なポイントとなるであろうし、このような面を観察することのできたことが、さらに役割あそびを進展させるのに重要なポイントとなろう。

(VI) お わ り に

これまで、共通ルールと集団との交渉について、わたくしどもの研究の結果を中心に役割あそびについての指導法について簡単にふれてきた。しかし、わたくしどもの研究はその緒についたばかりで、どちらかといえば、これからの研究に解決されなければならない問題が山積している。

だから、このような意味から、この小論を読んでいただければと思う。なお紙面の都合上、指導法についてまとめることができなかつたし、資料も相当割愛した。その点了承していただきたい。

(註) 資料として日本保育学会第17回大会発表論文抄録P57、P66を参照してください

(四日市市立四日市幼稚園)